

子ども制作ビデオ作品を地元CATVの番組で放映するプロジェクト学習の研究

高橋伸明*1 松原義忠*1 今城瑞江*1 藤原一志*1

一年間の総合的な学習の時間を使ってメディア・リテラシー教育を実践した。情報の特性を学び、それらを生かしてグループごとにビデオ作品を制作し、地元CATVの番組で放映してもらうというプロジェクト学習を展開することによって、子どもたちのメディア・リテラシーはどのように高まっていったかを考察する。

<キーワード>メディア・リテラシー教育、情報教育、プロジェクト学習、外部人材

1 はじめに

日本の小学校におけるメディア・リテラシー教育実践は、学校独自の特徴的なカリキュラムを生みつつ次第に普及・定着している。筆者らも近年、小学校における単元モデルを作成し、実践・研究に取り組んできた（高橋ら2002,2003）。

一方、実践を希望しながらも多くの小学校が諸問題を解決できず断念しているという調査結果も明らかになっている（駒谷2002）。その諸問題の一つには、メディア・リテラシー教育に関する専門的な知識を身に付けていない教師が、教材を作成することが難しかったり子どもに的確な助言ができなかったりすることも挙げられると考える。もし、メディアの専門的な知識をもった外部人材から協力が得られれば、より質の高いメディア・リテラシー教育がどの学校でも実現可能となり、普及への問題点の一つが解消することになる。

本研究は、どこの地域にもあるCATV局やメディアの専門家等の外部人材と連携を図りながら、メディア・リテラシー教育を実践する一試みを提案するものである。

2 目的

メディアや情報のもつ特性を学んだ後、自分たちの伝えたいことをビデオ作品に表し、地元CATVを通じて放映してもらうというプロジェクト学習を展開することによって、子どもたちのメディア・リテラシーはどのように高まったかということを示す。

3 方法

(1) 第一次「メディアや情報のもつ特性を学ぶ」学習の中で見られた子どもたちの発言、ワークシートへの記述等を分析し、メディア・リテラシーの高まりを考察する。
(2) 第二次「意図を明確にしたビデオ作品を制作する」学習の中で見られたビデオ作品の変容、ワークシートへの記述等を分析し、

メディア・リテラシーの高まりを考察する。

(3) 第三次「地元CATVでビデオ作品を放映してもらう」学習の中で見られたリーフレットの内容、ワークシートへの記述等を分析し、メディア・リテラシーの高まりを考察する。

4 実践の概要

110単位時間のプロジェクト学習の流れを簡略に示すと、図1のようになる。

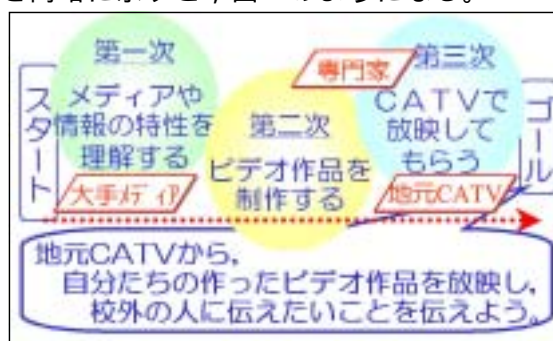


図1 プロジェクト学習の流れ

(1) 第一次 メディアや情報のもつ特性を学ぶ (30単位時間)

NHK学校放送「体験！メディアのABC」を活用したり、一般に放送されている番組を素材にして分析・話し合いを行ったりしながら、以下のような内容を学習した。

身の回りにはたくさんの種類のメディアがある。

写真の順番を変えて並べると、同じ写真でも伝わる情報が変わってくる。

同じ被写体を映してもアップで撮影するのとルーズで撮影するのとでは、伝わる情報は変わってくる。

写真と文章を組み合わせて情報を伝えるときには、写真は一目見て伝えたいことが伝わるものを使い、文章は写真では伝えきれないことを説明するようにするとよい。また見出しは、制作者が一番伝えたいことを

*1 岡山県笠岡市立中央小学校 nob@hi-bridge.net



写真1 キャッチコピーの特性を学ぶ
 分かりやすく短くまとめて表すと良い。
 キャッチコピーは、消費者に商品の長所を強調して伝えることを目的に作られている。同じ場所・時間に取材をしても、撮影者や編集者の意図によって、全く違った情報を伝えるビデオ作品をつくることができる。効果音によって、映像の印象が大きく変わって伝わる。

テレビCMは短時間の中に様々な映像・音声の技法を凝らして制作されているが、その意図は消費者にその商品を印象づけて購入してもらうことにある。

マスメディアが伝える情報の中には、受け取り方によっては問題のある情報も含まれている場合がある。

(2) 第二次 意図を明確にしたビデオ作品を制作する(60単位時間)

4クラス131名の児童が24グループに分かれてグループを作り、約30秒のビデオ作品を制作した。ディレクターを中心に地元CATVを通じて学校外の人に伝えたいことを掲げ、作品テーマを決定した。

各グループの作品テーマを集約すると以下のようなになる。

- ・環境問題(4作品)
- ・カブトガニ(4作品)
- ・地元銘菓カブトガニまんじゅう(3作品)
- ・市内の公共施設(6作品)
- ・校内や学区の人物(3作品)
- ・学校の施設や学校のよさ(4作品)

制作の過程で「伝えたいことが分かりやすく伝わっているか。」という視点を持ち、繰り返し自己評価・相互評価を行った。さらに、下村健一氏(市民メディアトレーナー、元TBS)を招き、学年全体で中間審査会も実施した。作品に対して、専門家の視点から「伝えたいこと」と「表現方法」とのズレを数々指摘していただいた。子どもたちはそのアドバイスを生かしながら再取材・再編集に取り組み、ビデオ作品を仕上げた。



写真2 外部人材を招いての中間審査会

(3) 第三次 地元CATVでビデオ作品を放映してもらおう(20単位時間)

子どもたちは自分たちのビデオ作品で「伝えたいこと」をリーフレットにまとめ、地元CATV局で放映していただくことを目標にしたPR活動を行った。また、完成した作品を保護者と学年全員の前で紹介する「ビデオ作品発表会」を行い、一年間の学びの成果を振り返った。

単元の終末では、一年間の学習を通して学んだ「メディアとのつき合い方」を振り返り、多様な価値観との出合いや情報の受け止め方の広がり・深まり、情報社会における自分自身の生き方等について考えをまとめた。

5 考察

(1) 第一次 メディアや情報をもつ特性を学んで

4(1) ~ の学習で見られた子どもの反応(発言、ワークシートの記述)から、メディア・リテラシーの高まりが表れたものをいくつか例示する(文例1)。

文例1 子どもの記述・発言より

「メディア」は人と人とのつながりを作る大切なものだと思った。同じような情報を伝えていても、メディアによって一つずつ性質がちがうことも分かった。わたしもいろいろなメディアを使って情報を交換?してみたい。

同じ写真でも「追いかけている」「逃げている」と、反対の意味を伝えることができるのに驚いた。

ふだん何となくデジカメで写真を写しているけど、アップやルーズを使うときもう少し「何が伝えたいのか」ということを意識したい。

みんなの作ったWebページを見ながら話し合っ、写真は伝えたいことがもっとパッと伝わるものにしなければ

ならないとか、記事にむだな言葉が多いとかこれまで気づかなかったことがたくさん分かるようになった。カプトガニまんじゅうのキャッチコピーを作るとき、まんじゅうの良いところは何かということをしつこくけんめい考えた。でもぼくはあまり好きではないので、ちょっと困った…。同じ給食時間の様子でも、手をアップにしたものを集めたビデオと顔をアップにしたものを集めたビデオとでは、伝えようとしていることが違うな、とはっきり分かった。効果音のことを勉強しながら、ドラマでは「ここでこういう曲がかかると感じが出るよな」と思うような音楽がよく使われていることを思い出した。たった15秒や30秒のCMを作るのでもすごく工夫してある。見ておもしろく「これを買いたいなあ。」と思わせるなんて、すごいと思った。いつも家ではふつうに見ているけど、やっぱり目的があって作るんだなあとわかった。

(あるバラエティ番組)はおもしろいからいつも見ているけど、今日意見交流をして見たくない人の気持ちを聞いて、「ああ、そういう考え方もあるんだ」と思った。悪いところはマネをしないように自分で判断して受け止め、これからもテレビを見たい。

以上のような反応から、子どもたちは様々なメディアから伝えられる情報の特性を知り、「情報は制作者の意図によって構成されていること」を学んだと考える。

また、こうした「メディアや情報も持つ特性」の理解は、第二次で自分たちがビデオ作品を制作する過程で実践的に生かされていったと考える。

(2) 第二次 意図を明確にしたビデオ作品の制作を通して



写真3 取材・編集を繰り返してビデオ編集

ビデオ作品を制作する過程で繰り返し行ってきた評価活動によって、子どもたちの作品は大きく変容していった。例えば、「カプトガニ」をテーマにしたあるグループの作品について大まかに表すと以下ようになる。

<p>(段階1)</p> <p>作品名「カプトガニの紹介」</p> <p>インタビュアーの音声も入れたまま学芸員のインタビューを紹介。博物館・館内の様子・水槽で泳ぐ様子・化石の映像を含め約55秒。</p>
<p><教師・児童相互による評価・助言></p> <p>「時間を短縮させるためには音声を字幕に代える方法もある」</p> <p>「カプトガニの中でも一番伝えたいことは何かを決め、番組名を考えよう」</p>
<p>(段階2)</p> <p>作品名「カプトガニは非常に珍しい生き物」</p> <p>インタビュアーの音声を字幕に代え学芸員の音声部分のみを使う。カプトガニの化石映像を中心に編集。館内の様子は削除。約40秒。</p>
<p><下村健一氏による評価・助言></p> <p>「字幕は少なめに」「できるだけ映像で語ろう」</p> <p>「捨てる勇気を持ち、伝えたいことを絞ろう」</p>
<p>(段階3)</p> <p>作品名「カプトガニは非常に珍しい生き物」</p> <p>学芸員のインタビュー音声の前後を削除し、不足した情報を字幕で説明。しかし化石の映像は長めに残す。一番伝えたいことはカプトガニの映像に字幕を重ねて表現。約30秒。</p>

図2 あるグループのビデオ作品の変容

これらは、評価活動が「伝えたいことをより明確に表現する」ために有効であることを示している。その中でも専門家による助言が特に効果的であったと考える(文例2)。

文例2 下村氏を招いての中間審査会後に記述したチェックカードより

- ・下村さんに注意する点などを教えてもらったので安心するし、改めることもできるので良かったです。
- ・私の班のことではなくても、他の班が失敗したことについて下村さんがアドバイスをしているのが役に立った。
- ・アドバイスをしてもらって、作品の意図がずれてきているのに気がついた。他のグループの映像を見て、むだな部分が多いのにも気づいた。

以上の活動の結果、子どもたちは何度も何度も取材・編集を繰り返すこととなり、もの見方・考え方、表現技法等の様々な学びを

得ることができたと思う。

(3) 第三次 地元CATVで自分たちの作品を放映してもらうことを通して



写真4 CATV番組で放映された映像(一部)

ビデオ作品のよさをPRするためのリーフレット作りでは、自分たちの「伝えたいこと」「作品の見どころ」等を、短時間に分かりやすくまとめた。これは取材・編集を繰り返しながら作品を制作した後だったので、自分たちの制作意図を明確にとらえ直すことができたためと考える。また、実際に自分たちの作品が放映された後には、「本当に放送されてビックリした。」「自分たちの作品がたくさんの人に見てもらえるなんて、すごいことだと思う。」など、達成感・満足感を表した感想が多く見られた。学習の成果を自覚・定着させるために有効だったと考える。

一年間の学習の終末に「メディアとのつき合い方」を振り返り記述させたものの一部を以下に抜粋する(文例3)。

文例3 単元終了時の子どもたちの自由記述より

- ・以前はテレビなどで伝えている情報はうのみにしていたけど、今は「これは自分にとって本当に必要な情報か？そして正確な情報か？」という疑問をもちながら見ている。
- ・今は番組を見ながら制作者の意図を感じながら受け取っている。
- ・アイコンタクト、効果的な資料、手書きのよさとワープロのよさどちらを生かすか、...など相手に分かりやすく伝えることの大切をよく考えている。
- ・「いつ」「どこで」「だれが」「何を」「どうして」「どうなった」が大切！
- ・テレビなどが伝える情報は本当とは限らないと分かったけど、全てうそでもないから、...難しいんだと思う。
- ・これからは判断力を使って情報を活用したい。だからこそ今まで、テレビ、インターネット等を使った学習をしてきたんだ。

一年間を通して実践してきた学習は、子どもたちにメディアとのつき合い方を考えさせることができ、その学びの意義も自覚させることができたので、有効だったと考える。

6 結論

(1) 第一次でメディアや情報のもつ特性について学習したことは、メディアが伝える情報の受け止め方、自分自身が発信する際の考え方等について、多様な価値観を示すことができ有効だった。また第二次でビデオ作品を制作する際の基礎的知識として生きて働き有効だった。

(2) 外部人材から子どもたちのビデオ作品に対して専門的なアドバイスをいただいたことは、子ども自身や教師ではもち得ない「情報のもつ特性」に関する気づきを得ることができ有効だった。

(3) 地元CATVを通してビデオ作品が放映されたことは、自分たちの制作意図を明確にとらえ直すことができ有効だった。また自分たちの学習に達成感・成就感をもち、メディアとのつき合い方を学んだ意義を自覚することもできたので有効だった。

7 おわりに

地元CATV・メディアの専門家等の外部人材を活用したプロジェクト学習によって、子どものメディア・リテラシーの高まりは認められた。こうした実践を各学校で行う場合、メディア・リテラシー教育の必要性や価値を、連携する放送局関係者に理解していただくことが重要になってくる。そのことは、視聴者と放送局の関係をより多様なものへと導くことにもなり、学校教育が情報社会の中で担う新しい役割と考えることもできる。

【主な参考文献】

[1]高橋伸明ほか(2003)：メディア・リテラシーを育てる授業作りのための単元モデルに関する研究，日本教育工学会第19回大会発表論文集

[2]高橋伸明ほか(2002)：小学生のメディア・リテラシー育成のための単元モデル，日本教育工学会第18回大会発表論文集

[3]駒谷真美(2002)：「小学校におけるメディア・リテラシー教育の実践調査」，生涯学習社会におけるメディア・リテラシーに関する総合的研究，国立教育政策研究所

【謝辞】

本研究は、(財)松下視聴覚教育研究財団・第28回実践研究助成を受け推進することができました。関係の皆様深く感謝いたします。